

2023 ズバリ! 的中



古文

学習院大学

入試問題本文が一致、かつ問い内容が複数個所的中

入試問題

2月6日実施 コア、プラス方式
三〔問題〕(三)、(八)

河合塾

高3 II期 高3古文TJ テスト
第十一講 問一
高3 II期 高3古文TNテスト
第十一講 問二、問五

高3古文TJ テスト

次の文を読んで、後の問いに答えよ。

* この探集よりさきに、* 千五百番の歌合せせ給ひしにも、すぐれたる限りを撰ばせ給ひて、この道の聖たち判じけるに、やがて院も加はらせ給ひながら、⁽¹⁾なほこのなみにはたち及びがたしと卑下せさせ給ひて、判の言葉をば記されず。御歌にて優り劣れる心ざしばかりをあらはし給へる、なかなかいと艶に侍りけり。

⁽²⁾上のその道を得給へれば、下もおのづから時を知る習ひにや。男も女も、この御世にあたりて、よき歌よみ多く聞こえ侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の帝の御後に、* 俊房の左の大臣と聞こえし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、官あさくうち続き、四位ばかりにて失せにし人の子なり。まだいと若き齡にて、底ひもなく深き心ばへをのみ詠みしこそ、いとありがたく侍りけれ。この千五百番の歌合の時、院の上のたまふやう、「こたみは、みな世に許りたる古き道の者どもなり。宮内は、* まだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなむ。かまへてまろが面起こすばかり、よき歌つかうまつれよ」とおほせらるるに、面うち赤めて、涙なみてさぶらひけるけしき、限りなき好きのほども、あはれにぞ見えける。さてその御百首の歌、いづれもとどりなる中に、

三次の文章を読んで、後の問題に答えなさい。(配点 四十点)

この探集よりさきに、千五百番の歌合せせ給ひしにも、すぐれたる限りを撰ばせ給ひて、この道の聖たち判じけるに、やがて院も加はらせ給ひながら、⁽¹⁾なほこのなみにはたち及びがたしと卑下せさせ給ひて、判の言葉をば記されず。御歌にて優り劣れる心ざしばかりをあらはし給へる、なかなかいと艶に侍りけり。
⁽²⁾上のその道を得給へれば、下もおのづから時を知る習ひにや。男も女も、この御世にあたりて、よき歌よみ多く聞こえ侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の帝の御後に、俊房の左の大臣と聞こえし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、官あさくうち続き、四位ばかりにて失せにし人の子なり。まだいと若き齡にて、そこひもなく深き心ばへをのみ詠みしこそ、いとありがたく侍りけれ。
この千五百番の歌合の時、院の上のたまふやう、「こたみは、みな世に許りたる古き道の者どもなり。宮内はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなむ。かまへてまろが面起こすばかり、よき歌つかうまつれよ」とおほせらるるに、面うち赤めて、涙なみてさぶらひけるけしき、限りなき好きのほども、あはれにぞ見えける。
さて、その御百首の歌、いづれもとどりなる中に、
薄く濃き野辺のみどりの若草に跡ぞ見ゆる雪の消え
草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く消えけるほどぞ、おしはかりたる心ばへなど、まだしからむ人は、いと思ひよりがたくや。この人、年つふるまで Y X D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z AA AB AC AD AE AF AG AH AI AJ AK AL AM AN AO AP AQ AR AS AT AU AV AW AX AY AZ BA BB BC BD BE BF BG BH BI BJ BK BL BM BN BO BP BQ BR BS BT BU BV BW BX BY BZ CA CB CC CD CE CF CG CH CI CJ CK CL CM CN CO CP CQ CR CS CT CU CV CW CX CY CZ DA DB DC DD DE DF DG DH DI DJ DK DL DM DN DO DP DQ DR DS DT DU DV DW DX DY DZ EA EB EC ED EE EF EG EH EI EJ EK EL EM EN EO EP EQ ER ES ET EU EV EW EX EY EZ FA FB FC FD FE FF FG FH FI FJ FK FL FM FN FO FP FQ FR FS FT FU FV FW FX FY FZ GA GB GC GD GE GF GG GH GI GJ GK GL GM GN GO GP GQ GR GS GT GU GV GW GX GY GZ HA HB HC HD HE HF HG HH HI HJ HK HL HM HN HO HP HQ HR HS HT HU HV HW HX HY HZ IA IB IC ID IE IF IG IH IJ IK IL IM IN IO IP IQ IR IS IT IU IV IW IX IY IZ JA JB JC JD JE JF JG JH JI JJ JK JL JM JN JO JP JQ JR JS JT JU JV JW JX JY JZ KA KB KC KD KE KF KG KH KI KJ KK KL KM KN KO KP KQ KR KS KT KU KV KW KX KY KZ LA LB LC LD LE LF LG LH LI LJ LK LL LM LN LO LP LQ LR LS LT LU LV LW LX LY LZ MA MB MC MD ME MF MG MH MI MJ MK ML MN MO MP MQ MR MS MT MU MV MW MX MY MZ NA NB NC ND NE NF NG NH NI NJ NK NL NM NO NP NQ NR NS NT NU NV NW NX NY NZ OA OB OC OD OE OF OG OH OI OJ OK OL OM ON OO OP OQ OR OS OT OU OV OW OX OY OZ PA PB PC PD PE PF PG PH PI PJ PK PL PM PN PO PP PQ PR PS PT PU PV PW PX PY PZ QA QB QC QD QE QF QG QH QI QJ QK QL QM QN QO QP QQ QR QS QT QU QV QW QX QY QZ RA RB RC RD RE RF RG RH RI RJ RK RL RM RN RO RP RQ RR RS RT RU RV RW RX RY RZ SA SB SC SD SE SF SG SH SI SJ SK SL SM SN SO SP SQ SR SS ST SU SV SW SX SY SZ TA TB TC TD TE TF TG TH TI TJ TK TL TM TN TO TP TQ TR TS TU TV TW TX TY TZ UA UB UC UD UE UF UG UH UI UJ UK UL UM UN UO UP UQ UR US UT UY UZ VA VB VC VD VE VF VG VH VI VJ VK VL VM VN VO VP VQ VR VS VT VY VZ WA WB WC WD WE WF WG WH WI WJ WK WL WM WN WO WP WQ WR WS WT WY WZ XA XB XC XD XE XF XG XH XI XJ XK XL XM XN XO XP XQ XR XS XT XU XV XW XX XY XZ YA YB YC YD YE YF YG YH YI YJ YK YL YM YN YO YP YQ YR YS YT YU YV YW YX YZ ZA ZB ZC ZD ZE ZF ZG ZH ZI ZJ ZK ZL ZM ZN ZO ZP ZQ ZR ZS ZT ZU ZV ZW ZX ZY ZZ

かくて、この度撰ばれたるをば、「新古今」といふなり。
元久二年三月二十六日、院に参りて行なはせ給ふ。いみじき世のびびきなり。かの延喜の昔おほしよそへられて、院御製

薄く濃き野辺のみじりの若草に跡まで見ゆる雪のむらさき
 草の緑の濃き色に「A」おはかりたる心へなご、まだしからむ人は、いと思
 ひりりかたく、この人、年つるまで「B」、げにかばかり、目に見えぬ鬼神をも動か
 さましに、若くて失せに、いとほしく、あたらしくなむ。
 (増補による)

*この撰集、新古今和歌集の撰集
 *千五百番の歌合、歌合とは、左右二組に分かれた歌人たちが歌を詠み、その歌の優劣を判者(はかり)が判定して勝負を決める文学的な遊戯。この場合は、三十人の歌人が各自百首ずつ詠進して、千五百番の歌を詠じた。
 *後房の左の大臣、左大臣、源朝房、村上天皇の第七皇子具平親王の御
 *まだしからむ、未だである。
 問一 傍線(1)(3)(4)の意味として最も適当なものを、それぞれ次のア〜エの中から選び、その記号を記せ。

- (1)「なほこのなみにはたま及びがたし」
 ア なんといってもこの歌合に参加するには実力不足で無理である
 イ どう努力しても歌合に選ばれた歌人たちと同列というわけにはいかない
 ウ やはりこの判者たち一同には肩を並べられない
 エ それでもこの御匠たちのやり方には納得できない
- (3)「世に許りたる」
 ア 時流に乗り遅れた
 イ 世間に認められていない
 ウ 世間から忘れられた
 エ 人々をこめてはなされていく
- (4)「みたらしくなむ」
 ア 今までにはなかったことです
 イ むなしいことです
 ウ りっぱなことです
 エ 惜しまれることです

いそのかみ古きを今にならへし昔の跡をまた尋ねつづ
 摂政良経の大臣、
 敦尚や大和ことの集海にして拾ひし玉はみかれにけり
 つぎつぎ、ずん流るめりしかと、さのみうるさくてなむ。
 (増補による)

(注) 千五百番歌合は鎌倉時代、後鳥羽院が主催した歌合。仙洞百首歌合とも。和歌史上最大規模の歌合で、『新古今和歌集』撰集資料として第一位の九十首入集で、建仁三(一一〇三)年春頃成立。つぎつぎ、ずん流るめりしかと次々と歌を詠みあげるようであったが。

- 問二 (一)傍線部ア〜ウの意味として最も適切なものを、次の1〜4の中からそれぞれ一つ選んで、解答欄にマークしなさい。
 (解答用紙に)
- ア このなみにはたま及びがたし
 - 1 この名人たちの水準には達しない
 - 2 この歌合では勝ちそうにもない
 - 3 この流行にはうまく乗れそうもならない
 - 4 この役目は自分にはあわしくなむ

- イ 面起こすばかり
- 1 目を見張るほどに
- 2 面目が立つほどに
- 3 恥すかしく思うほどに
- 4 興奮するほどに
- ウ あたらしくなむ
- 1 革新的なものです
- 2 いままでなかったものです
- 3 若造だったことです
- 4 惜しまれることです

高3古文TNテスト

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

この撰集よりさきに、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、すぐれたる限りをえらばせ給ひて、その道の聖たち判じけるに、院も加はらせ給ひながら、「なほ、このなみにはたま及びがたし」と卑下せさせ給ひて、判の詞をばしるされず、御歌にて、優り劣れる心ざしばかりをあらはし給へる、なかなかいと難に侍りけり。
 上のその道を得給へれば、下もおのづから時を知る習ひにや、男も女も、この御代にあたりて、よき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の帝の御後に、後房の左の大臣と聞えし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、官浅くて、うち続き四位位ばかりにて失せにし人の子なり。まだいと若き時にて、そこひもなく深き心ばへをのみ詠みしこそ、いとありがたき侍りけれ。
 この千五百番の歌合の時、院の上のたまふやう、「こたみは、みな世に許りたる古き道の者どもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなん。かまへてまろが面起すばかり、よき歌つかうまつれ」と仰せらるるに、面うち赤めて涙ぐみてさぶらひけるけしき、限りなき好きのほど、あはれにぞ見えける。

- (四) 宮内卿が詠んだ歌はどのような点が評価されていると考えられますか。次の1〜4の中から最も適切なものを一つ選んで、解答欄にマークしなさい。(解答用紙に)
- 1 今年の若草で緑色の濃淡の色合いから、去年の雪の消え様の運達の相違までもが思い描ける様を詠んでいる点
 - 2 去年から降り残った雪の今年の春のむら清良の状態に、去年の草の密度の名残りが思い描けることを詠んでいる点
 - 3 むら消え残った雪の様子から、これから生えそろうてくる若草の濃淡までも予想できることを詠んでいる点
 - 4 去年から降り残っている雪の白い色合いと、今年の若草の緑色とのまた模様対比の美しさを詠んでいる点

さてその御百首の歌、いづれもとどりなる中に、

薄く濃き野辺の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え

草の緑の濃き薄き色にて、去年の古雪遅く疾く消えける程を、推し量りたる心ばへなど、まだしからん人は、いと思ひよりがたくや。この人、年つもるまであらましかば、げにいかばかり目に見えぬ鬼神をも動かしなましに、若くて失せにし、いといとほしくあたらしくなん。

(注) この書集——「新古今和歌集」をさす。

歌合——歌人たちが二組に分かれ、和歌を比べ合わせて、優劣を競った遊び。

院——後鳥羽院をさす。

(増鏡)

問一 傍線——A、Cの解釈として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号

を記せ。

A このなみにはたち及びがたし

1 この並みの者たちと自分は同列ではない。

2 この上人たちの列には並べそうもない。

3 この度の獲者の列には加わりたくない。

4 この判者たちの列に並ぶことはできない。

5 この歌詠みの仲間に入ることはできない。

B 下のおのづから時を知る習ひにや

1 臣下たちも時代の機運を自然と察知する世の常のことによるのであろうか。

2 臣下たちもおのづと物事の潮時を心得るといふ世のならいによるのであろうか。

3 下じもの者も自分から進んで時の流行を追うといふ世間の風潮によるものか。

4 下じもの者もつい世間のすう勢に従うといふ人の世の定めによるのであろうか。

5 下じもの者も自然に時の支配者にこびへつらう世のならわしによるものか。

C けしうはあらずと見ゆればなん

1 だれもふしぎに思いはしないだろうと信じて判者の列に加えたのである。

2 それほどさしつかえないだろうと思つて少しだけ載せるのである。

3 加えても悪くはないだろうと思われるので参加させるのである。

4 まだそれほどではないとみえるので今後の精進を期待するのである。

5 けつしておかしくはなからうと思つたので撰者に入れるのである。

問五 「薄く濃き……」の歌は、どのような点ですばらしいと筆者はいつているか。次のうち

から適当なものを一つ選び、その番号を記せ。

1 野辺の緑の若草に、色の濃い所と薄い所があるのに目をつけて、去年の雪景色を思い

うかへた着想。

2 去年の雪がまだらに消えていった跡をこまかく観察し、今年の若草の生え具合を思い

はかつてみせる機知。

3 春草の緑の濃淡を、去年つもつた雪がまだらに消えてゆくさまに重ねあわせてみてい

る趣向。

4 濃く薄く芽を出している若草の緑と、ところどころに残る雪の白さを対比してとらえ

た風情。

5 今年の雪が濃く薄く残る、その程あいによつて、来年の若草の緑の濃淡まで推測して

みせた趣。